医事・文談　九百六十

平岸　三八

《正岡子規（36）の続き》その248
子規と漱石（五十七たび続）

久保賴江さんが、夏目家に出入りしていた時代は、「猫」の第一回を「ホトトギス」に掲載したのが明治38年1月号だから、その前年あたりからであろう。夫君の猪之吉がドイツへ留学したのが、明治36年からほぼ2年間だから、その間のことである。

どうして賴江が漱石と識り合ったかについては記述されていないが、袴を穿きながら、自転車で颯爽とやってきたのだから随分ハイカラな女性であったらしい。それにまだ結婚したばかりの若さで中年過ぎの漱石と、対話をかわしていたらしいから、その点でもなかなかの才女であったことをうかがわせる。

賴江は明治17年9月17日生れだから、明治37年にはまだ21歳ということになる。

猪之吉が洋行中なので、医科大学長の大沢博士の令弟のところに同居とあるが、東大医科大学長は、明治34年9月以来、青山胤通がその死の大正6年まで長期にわたり学長を勤めていた。大沢は名は謙二、生理学教授であった。学長になったことはないようである。

賴江さんが、かなり親しくしばしば夏目家を訪れ、鏡子夫人とも打ちとけて家族的な交際をしていることから、漱石の賴江さん宛の書簡の内容から推察したことが、ほぼ当っていることが分る。

写真を贈ったり、物のやりとりをしたり、著書（「猫」）を送ることを依頼したりは、家族つきあいの親密さを示すものだろう。

考えれば、より江（以後これに統一する）さんと漱石との初対面は、漱石が松山中学の英語教師を勤めていた明治28年にさかのぼる。当時、漱石はより江さんの実家である祖父の上野家の離れを借りて下宿していたのである。そこへ日清戦争から命からがら帰ってきた子規が同居することとなり、より江さんはふたりと面識を得ることとなる。

しかしそれは、より江さんが夏目家に出入りする明治37、38年頃よりは10年も前のことである。

しかもその間に漱石は、熊本五高への転任、さらに英国留学の二年、帰国してからの東京での就職と、その身上はかなりの変化がある。

より江さんにとっても、故郷松山からの上京、女学校卒業、結婚とかなり大きな変りようである。

この10年間に、より江さんと漱石との間に、接触があったであろうか。どうも接触があったとは思えない。

まだ幼少といってもいい子どもと社会人、お互に居所の移り変りなど、かかわりがあったとは考えられない。

より江さんばかりでなく、上野家と漱石との間にも、下宿人としての漱石が出ていってからは、まずつきあいはなかったであろう。身分上の違いがあまりに大きいし、住所の変化もある。お互が音信を交わすこともなかったであろう。

それでは、より江さんが夏目家を訪れたのは、どういう機縁によったのであろう。「10年も昔、松山に居た時分、夏目さんという人が下宿していたことがあるんだよ、正岡子規という俳句をつくる人とお友達だった筈だが。あの人はどうしたかしら。なんでも熊本の高等学校とかの先生になったはずだが」とでも両親から聞かされていたのではなかろうか。

より江さんが千駄木の漱石邸を初めて訪れた時のことは、虚子宛の手紙（虚子著「漱石氏と私」中にあり）に書かれている。それによると、「十年も前に松山で、といふやうな口上でおめにかかれるかどうかとおづ〳〵してゐたのですが、すぐあって下すって大きくなったねといって下すった時は嬉しくてたまりませんでした。そして私の姓が変った事をおききになって、まあよかった、美術家でなくっても文学趣味のあるお医者さんだからとおっしゃったのにびっくりいたしました。」

子供の時、美術家になりたいとでもいったのを、漱石が聞いて、覚えていたのである。

より江さんも、漱石も昔のことを思い出して、それから交際を続けたのであろう。

お知らせ

事務局の年末年始休みについて

北海道医師会ならびに北海道医師国民健康保険組合の事務局は、
平成16年12月29日㈬から平成17年１月３日㈪までの期間、休業いたします。